

「小学校外国語活動」における教員の指導力向上に関する研究（中間報告）

－教員の意識調査にもとづいた指導力向上プログラムの開発－

教 務 部 部長	水田 時男		
企 画 調 査 課 課長	浅井 憲一	指導主事	稲次 一彦
義務教育研修課 課長	越川 昌信	指導主事	行本 健一 指導主事 早瀬 幸二
高校教育研修課 課長	長谷川 宏	主任指導主事	高橋 信之
情報教育研修課 課長	難波 宏司	指導主事	三原 智雄

はじめに

平成20年3月に小学校の新学習指導要領¹⁾が告示され、第5学年及び第6学年に「外国語活動」が導入されることとなった。昭和61年4月の臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」²⁾の中で、「英語教育の開始時期についても検討を進める」と記載されるなど、小学校における「外国語活動」の導入が示唆されてから現在まで約20年の間に、総合的な学習の時間を中心に全国の小学校で「英語活動」が取り入れられるようになった。文部科学省が実施した平成19年度小学校英語活動実施状況調査によると、97.1%の割合で「英語活動」が実施されている。しかし、年間実施時間については、70時間を超える学校から10時間を下回る学校まで現状は様々である³⁾。また、「英語活動」の主たる指導者は各学年とも学級担任が90%を超えているとされている⁴⁾が、平成18年3月中央教育審議会外国語専門部会報告によると、小学校段階から英語を必修とすることに積極的な回答をしている教員の割合は36.6%にとどまっているという実態もある⁵⁾。これは、多くの小学校教員が外国語の教授法について専門的な教育を受けていないことから、「外国語活動」の指導に対してとまどいや不安を感じていることが原因であると考えられる。

当所では、平成16年度から小学校教員を対象として、児童が外国の文化や生活への関心を高める「英語活動」の工夫や、「英語活動」における指導の形態や教材・教具の活用方法の習得及び「英語活動」の指導方法の理解をめざし、「英語活動」に係る講座を開設してきた。本年度は、「総合的な学習の時間」における「英語活動」の取組を踏まえながら、小学校における「外国語活動」の実践的指導力を高めるため、年間3回の研修を行う研究講座を実施した。

本研究は、以上のような状況や実績を踏まえ、小学校教員の「外国語活動」に対する意識を調査し、その結果をもとにした指導力向上プログラムを開発することを目的とする。本年度は、アンケートにより県内の小学校における教員の「外国語活動」に対する意識を調査し、その分析結果をもとに研修講座の在り方について検討し、「平成22年度外国語活動実践研修講座」（以下、「外国語活動実践研修講座」という）に反映する。そして、平成22年度には、「外国語活動実践研修講座」の内容や研修方法についての検証を行い、指導力向上プログラムを策定する。

1 「外国語活動」に対する教員の意識

(1) アンケート調査の概要

小学校教員の意識調査にもとづいた指導力向上プログラムの策定に向け、平成21年12月に、学校全体の取組をみる「小学校『外国語活動』に係るアンケート調査（学校用）」（以下、「調査（学校用）」という）と教員の意識をみる「小学校『外国語活動』に係るアンケート調査（教員用）」（以下、「調査（教員用）」という）の2種類を実施した。「調査（学校用）」では、「外国語活動」に対する教員の意識と学校の取組状況との関連を調べることを目的とし、「調査（教員用）」では、「外国語活動」に対しての小学校教員のとまどいや不安といった意識を調べることを目的とした。

調査対象校の選定にあたっては、地域、学校の取組状況等、偏りがないように配慮したうえで、神戸市立を

除く県内の市町立小学校18校（「平成21年度小学校外国語活動整備事業」に係る実践研究校6校を含む）を抽出し、当該小学校の全ての教員（臨時講師を含む）を「調査」の対象とした。調査の概要を表1に示す。

表1 アンケート調査の概要

名称	対象校(者)	調査内容の概要
「調査（学校用）」	阪神教育事務所管内 3校 播磨東教育事務所管内 3校 播磨西教育事務所管内 3校 但馬教育事務所管内 3校 丹波教育事務所管内 3校 淡路教育事務所管内 3校 計 18校	ア 年間授業時数 イ 年間指導計画 ウ 評価規準 エ A.L.Tや日本人英語教師の授業への参加 オ 教材 カ 校内研究組織 キ 校内研修 ク 中学校との連携 ケ 教員の指導力向上に向けた手だて ※ア、イ、エ、オについては「英語活動」を含む。
「調査（教員用）」	小学校教員381名 (有効回答者数304名)	ア 年齢 イ 教職経験年数 ウ 担当学年 エ 「外国語活動（英語活動）」の授業の担当経験 オ 新学習指導要領における「外国語活動」の目標の理解 カ クラスルーム・イングリッシュの使用の程度 キ 研修への参加 ク 「外国語活動」の指導に対する不安 ケ 「外国語活動」に関する研修の希望 ※エについては「英語活動」を含む。

(2) アンケート結果から

ア 新学習指導要領における「外国語活動」の目標の理解

学習指導要領「外国語活動」の目標には、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」と示されている。

図1は、「調査（教員用）」において、「あなたは、新学習指導要領における『外国語活動』の目標をどの程度理解していますか」の項目に、「よく理解している」「ほぼ理解している」「あまり理解していない」「ほとんど理解していない」の4件法で質問した結果をグラフにしたものである。

図1に示すとおり、全体では55.3%の教員が新学習指導要領における「外国語活動」の目標（以下、「目標」という）を「あまり理解していない」あるいは「ほとんど理解していない」と答えている。

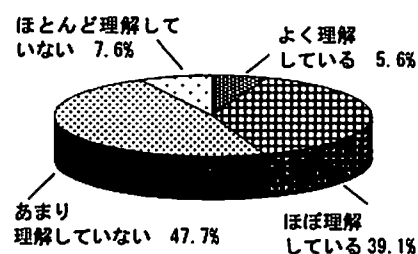


図1 「目標」の理解

イ クラスルーム・イングリッシュの使用

図2は、「調査（教員用）」において、「あなたは、『外国語活動』または『英語活動』の授業において、英語であいさつしたり、簡単な指示や質問をしたり、児童をほめたりすることがどの程度できますか」の項目に「よくできる」「ほぼできる」「あまりできない」「ほとんどできない」の4件法で質問した結果をグラフにしたものである。

図2に示すとおり、全体では52.9%の教員が『外国語活動（英語活動）』の授業において、英語であいさつしたり、簡単な指示や質問をしたり、児童をほめたりすること（以下、「クラスルーム・イングリッシュ」という）が「あまりできない」あるいは「ほとんどできない」と答えている。

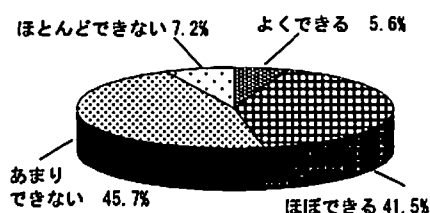


図2 クラスルーム・イングリッシュの使用

ウ 「外国語活動」の指導全般に対する不安

図3は、「調査（教員用）」において、「本年度から『外国語活動』が先行実施されていますが、あなたは『外国語活動』の指導全般に対してどの程度不安を感じますか」の項目に「強く不安を感じる」「不安を感じる」「少し不安を感じる」「不安を感じない」の4件法で質問した結果をグラフにしたものである。

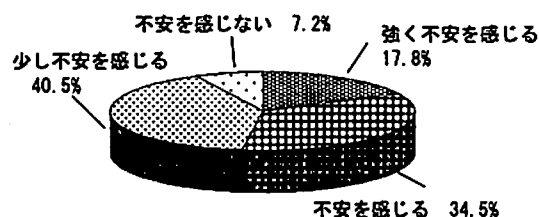


図3 指導全般に対する不安

図3に示すとおり、全体では、52.3%の教員が、「外国語活動」の指導全般に対して、「強く不安を感じる」あるいは「不安を感じる」と答えている。

エ 新学習指導要領に示されている内容の指導に対する不安

表2 新学習指導要領「外国語活動」に示されている内容の指導に対する不安の程度

内 容		平均値
内容①	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験させること	2.28
内容②	積極的に外国語を聞いたり話したりさせること	2.57
内容③	言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを理解させること	2.46
内容④	外国語の音声やリズムなどに慣れ親しませるとともに、日本語との違いを理解させ、言葉の面白さや豊かさに気づかせること	2.63
内容⑤	日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを理解させ、多様なものの見方や考え方があることに気付かせること	2.27
内容⑥	異なる文化をもつ人々との交流等を体験させ、文化等に対する理解を深めさせること	2.42

表2は、「調査（教員用）」における、平成23年度に完全実施される「小学校学習指導要領 第4章 外国語活動」に示されている内容を指導することに対する不安について、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均値を求めた結果である。「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」の合計を4で割った値2.5を基準として考え、平均値が2.5より高い場合、不安を感じる程度が高いと考えることとする。

表2に示すとおり、前述の「目標」に示された「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことに関わる「内容④ 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しませるとともに、日本語との違いを理解させ、言葉の面白さや豊かさに気づかせること」や「内容② 積極的に外国語を聞いたり話したりさせること」の指導に対して不安を感じる程度が高くなっている（表内網掛け部分）。

オ 「指導者の役割」に対する不安

表3 「外国語活動」において求められる指導者の役割例に対する不安の程度

指導者の役割			平均値
授業の設計に関すること	役割①	指導計画を立てること	2.77
	役割②	教材や教具を作成したり活用したりすること	2.56
授業の実施に関すること	役割③	クラスルーム・イングリッシュを用いて児童に指示を出し、授業を進めること	2.61
	役割④	外国語を用いた歌やゲーム等の活動を行うこと	2.23
	役割⑤	A L Tとのチーム・ティーチングで授業を進めること	2.27
評価に関すること	役割⑥	評価を行うこと	2.98

表3は、「調査（教員用）」における、『小学校外国語活動研修ガイドブック』⁶⁾を参考に作成した「『外国語活動』において求められる指導者の役割例」（以下、「指導者の役割」という）に対する不安について、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均値を求めた結果である。

表3に示すとおり、「役割⑥ 評価を行うこと」が最も高い値を示しており、次いで「役割① 指導計画を立てること」や「役割③ クラスルーム・イングリッシュを用いて児童に指示を出し、授業を行うこと」、「役割② 教材や教具を作成したり活用したりすること」の順となっている（表内網掛け部分）。

カ 希望する研修の内容

表4は、「調査（教員用）」において、「あなたは、『外国語活動』について校内研修や校外研修でどのような内容を扱ってほしいと思いますか」について、「指導者の役割」をもとに考えられる研修の内容に対して第1希望～第6希望で回答を求めた結果のうち、第1～第3に希望する割合を表したものである。表3において高い値を示した「指導計画の立て方」「教材や教具の作成や活用の仕方」「クラスルーム・イングリッシュを用いた授業の進め方」に関する内容については、希望する研修の内容においても、第1～第3に希望する教員の割合が高くなっている。

（表内網掛け部分）しかし、「評価の行い方」については、「指導者の役割」に対する不安では最も高い値を示していたのに対し、研修の希望では第1～第3に希望する教員の割合が他の研修に比べて33.9%と最も低くなっている（表内二重下線部分）。

表4 希望する研修の内容

研修の内容	第1～第3に希望する割合
指導計画の立て方	<u>59.9%</u>
教材や教具の作成や活用の仕方	<u>56.3%</u>
クラスルーム・イングリッシュを用いた授業の進め方	<u>62.5%</u>
外国語を用いた歌やゲーム等の進め方	45.1%
A L Tとのチーム・ティーチングによる授業の進め方	42.4%
評価の行い方	<u>33.9%</u>

(3) アンケート結果の分析と課題

ア 英語に関する知識や英語の使用について自信のない教員が「外国語活動」の指導に不安を感じている

前頁表2に示したとおり、「内容② 積極的に外国語を聞いたり話したりすること」、「内容④ 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しませるとともに、日本語との違いを理解させ、言葉の面白さや豊かさに気づかせること」の指導において、不安を表す平均値が他の内容に比べて高かった。これらの内容は、前述の「目標」に示された「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことに関係している。兼重昇らは「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことを「小学校においては、特に『聞くこと』『話すこと』を通して、外国語の音声や表現に慣れ親しませるとし、中学校のように語彙や表現の定着を図るものとはしていない」⁷⁾と述べている。しかし、「いわゆるスキル面を表している」⁸⁾これらの内容に対しては、英語に関する知識に自信のない教員にとっては、語彙や表現の定着をしなければならないと感じていると考えられる。

また、表5は、「クラスルーム・イングリッシュ」の使用と指導全般への不安の関係を表したものである。表5に示すとおり、「クラスルーム・イングリッシュ」の使用が「あまりできない」あるいは「ほとんどできない」と答えた教員の29.2%が、指導全般に「強く不安を感じる」と答えており、「よくできる」あるいは「ほぼできる」と答えた教員の4.9%に比べて高い割合を示している（表内網掛け部分）。また、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として求めた平均値を比較しても、「あまりできない」あるいは「ほとんどできない」と答えた教員が2.98、「よくできる」あるいは「ほぼできる」と答えた教員が2.23と、「クラスルーム・イングリッシュ」ができない教員は指導全般にも不安を感じている傾向があることがわかる（表内二重下線部分）。

表5 指導全般に不安を感じる割合
（「クラスルーム・イングリッシュ」の使用別）

指導全般	クラスルーム・イングリッシュの使用	
	あまりできない ほとんどできない	よくできる ほぼできる
強く不安を感じる	<u>29.2%</u>	<u>4.9%</u>
不安を感じる	40.4%	28.0%
少し不安を感じる	29.8%	52.4%
不安を感じない	0.6%	14.7%
平均値	<u>2.98</u>	<u>2.23</u>

以上のことから、教員が不安を感じる理由の一つとして、英語に関する知識や英語の使用に対する自信のなさがあると考えられる。

イ 「外国語活動」の目標を理解していない教員が「外国語活動」の指導に対して不安を感じている

表6は、「目標」を「よく理解している」あるいは「ほぼ理解している」と答えた教員と「あまり理解していない」あるいは「ほとんど理解していない」と答えた教員における指導全般への不安を、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均値を求め比較した結果である。表6に示すとおり、「あまり理解していない」あるいは「ほとんど理解していない」と答えた教員の平均値が2.94、「よく理解している」あるいは「ほぼ理解している」と答えた教員の平均値が2.24と、「目標」を「あまり理解していない」あるいは「ほとんど理解していない」教員の方が高い値を示している。

表6 指導全般に対する不安
（「目標の理解の程度による比較」）

平均値	
あまり理解していない ほとんど理解していない	よく理解している ほぼ理解している
2.94	2.24

また、表7は、「目標」を「よく理解している」あるいは「ほぼ理解している」と答えた教員と「あまり理解していない」あるいは「ほとんど理解していない」と答えた教員における内容①～⑥の指導に対する不安を、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均値を求め比較した結果である。また、内容①～⑥の指導に対する不安では、前述の「目標」に示された「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことに関わる「内容④ 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しめるとともに、日本語との違いを理解させ、言葉の面白さや豊かさに気づかせること」や「内容② 積極的に外国語を聞いたり話したりさせること」において「よく理解している」あるいは「ほぼ理解している」と答えた教員と「あまり理解していない」あるいは「ほとんど理解していない」と答えた教員との差が他の内容に比べて大きくなっている（表内網掛け部分）。「外国語活動」の目標が、コミュニケーション能力の素地を養うことであり、発音や文法といったスキルの習得ではないことから、「目標」を理解することにより、英語を用いることに関する内容の指導に対しても不安が軽減されるものと考えられる。

表7 内容①～⑥の指導に対する不安（「目標」の理解の程度による比較）

内 容		平均値		差
		あまり理解していない ほとんど理解していない	よく理解している ほぼ理解している	
内容①	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験させること	2.55	1.94	0.61
内容②	積極的に外国語を聞いたり話したりさせること	2.89	2.18	0.72
内容③	言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを理解させること	2.70	2.17	0.53
内容④	外国語の音声やリズムなどに慣れ親しめるとともに、日本語との違いを理解させ、言葉の面白さや豊かさに気づかせること	2.96	2.23	0.74
内容⑤	日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを理解させ、多様なものの見方や考え方があることに気付かせること	2.54	1.93	0.60
内容⑥	異なる文化をもつ人々との交流等を体験させ、文化等に対する理解を深めさせること	2.63	2.15	0.48

ウ 「外国語活動」の授業を組み立てることに不安を感じている教員が多い

表8は、前述の表3に示した「指導者の役割」における授業の設計に関することと、授業の実施に関することに対する不安を、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均値を求め比較した結果である。表8に示すとおり、授業の設計に関することに対しての不安が授業の実施に関することに対する不安よりも高い値を示していることがわかった。また、前述の表4でも、「指導計画の立て方」に関する研修を希望する値が高かった。

表8 指導者の役割に対する不安

指導者の役割	平均値
授業の設計に関すること	2.67
授業の実施に関すること	2.37

表9は、「役割① 指導計画を立てること」に対して強く不安を感じている教員の他の役割に対する不安の程

表9 「指導者の役割」に対する不安
(「役割① 指導計画を立てること」に強く不安を感じる教員と全体との比較)

	指導者の役割	平均値		差
		「役割①」に強く不安を感じる教員	全体	
役割②	教材や教具を作成したり活用したりすること	3.41	2.56	0.85
役割③	クラスルーム・イングリッシュを用いて児童に指示を出し、授業を進めること	3.21	2.61	0.60
役割④	外国語を用いた歌やゲーム等の活動を行うこと	2.79	2.23	0.56
役割⑤	A L Tとのチーム・ティーチングで授業を進めること	2.76	2.27	0.49

度を、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均値を求めた結果である。表9に示すとおり、「役割② 教材や教具を作成したり活用したりすること」に対する不安の程度は、授業の実施に関する「役割③ クラスルーム・イングリッシュを用いて児童に指示を出し、授業を進めること」「役割④ 外国語を用いた歌やゲーム等の活動を行うこと」「役割⑤ A L Tとのチーム・ティーチングで授業を行うこと」に比べて高くなっている。また、全体との比較では、「役割② 教材や教具を作成したり活用したりすること」における全体との差が0.85と他の役割に比べ最も高い値を示している（表内網掛け部分）。「役割① 指導計画を立てること」に対して「強く不安を感じる」と答えた教員は、「役割② 教材や教具を作成したり活用したりすること」に対しても不安を感じる程度が、他の役割に比べて高いことがわかった。授業における一つ一つの活動に対しては研修等をととして習得が図られているものの、それらの活動を組み合わせた授業を構成するまでには至っていないと考えられる。

エ 評価を行うことに対して研修の優先順位が低い

表10は、現在「外国語活動」を担当しており、かつ「指導計画の立て方」に関する研修を第1～第3希望に選んだ教員の、「指導計画の立て方」以外の研修内容を希望する割合を示している。表10に示すとおり、評価の行い方を第1～第3希望に選んだ割合が他の内容に比べて高くなっている（表内網掛け部分）。実際に「外国語活動」の授業を行っている教員は、「目標」にもとづいて指導計画を立て、授業を行い、評価をするという、一連の学習過程の重要性を「外国語活動」においても感じていることがわかる。

また、『小学校外国語活動研修ガイドブック』では、「目標に対する達成度合いを測定することで、教師が自らの授業を省察し、授業改善へつなげることができる。また、同時に児童の学習意欲を高めていくことにもつながっていく」⁹⁾と記されている。

しかし、前述の表3に示したとおり、指導者の役割に対する不安では「評価の行い方」に対する不安を表す平均値が最も高かったのに対し、表4に示した研修の希望では第1～第3に希望する教員の割合が33.9%と他の研修に比べて低くなっていた。これは、「外国語活動」の評価が教科のような数値による評価ではないため、「評価を行うこと」に対して不安を感じるものの、「授業の設計」や「授業の実施」に関する研修を優先して希望していると考えられる。

表10 現在「外国語活動」の授業を担当しており、「指導計画の立て方」に関する研修を第1～第3希望に選んだ教員の希望する研修

研修の内容	第1～第3に希望する割合
教材や教具の作成や活用の仕方	49.3%
クラスルーム・イングリッシュを用いた授業の進め方	37.3%
外国語を用いた歌やゲーム等の進め方	24.0%
A L Tとのチーム・ティーチングによる授業の進め方	36.0%
評価の行い方	53.3%

2 「外国語活動」における教員の指導力向上を目指して

(1) 「平成21年度 コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動研究講座」

ア 概要

当所では、一般研修講座、出前研修、地区別研修講座、研究講座、eラーニングを取り入れた研修等、必要に応じた講座実施形態の工夫をしている。なかでも、研究講座は受講者による課題設定とその解決のための研究を中心とした講座で、指定された回数を継続して受講し、研修と実践の繰り返しの中で研究を深める講座である。

「平成21年度 コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動研究講座」（以下、「外国語活動研究講座」という）では、『小学校外国語活動』のねらいや内容の理解、『小学校外国語活動』の充実に向けた中学校との連携の在り方についての理解」「自校の実態に即した『小学校外国語活動』の授業プランの作成」をねらいとし、受講者が設定した研究テーマに沿って実践と研修を繰り返した。

第1回では、鳴門教育大学大学院兼重昇准教授による「小学校外国語活動」の目標や内容についての講義や昨年度の受講者による実践発表、自校の課題の分析、研究テーマの設定等を行い、第2回では受講者が実施した授業の検討を行った。また、第

3回では、これまでの取組を踏まえた授業プランの改善や研究成果の整理、兵庫教育大学大学院吉田達弘准教授による中学校との連携の在り方についての講義を行った。（表11）

表 11 「平成 21 年度 コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動研究講座」の概要

第1回	講義『小学校外国語活動』のめざすもの ー児童のコミュニケーション能力の素地を養うためにー 実習『小学校外国語活動』におけるコミュニケーション活動の実践 ・コミュニケーションを図る楽しさを体験する活動 ・異なる文化等に対する理解を深める活動 ・ALT等とTTで行う活動 等
	発表・協議「小学校における外国語活動の現状と課題」 演習・協議「学校の実態に即した授業プランづくりⅠ」 ・授業プランの作成 ・研究テーマの設定
第2回	公開授業「自校の実態に即した実践」 協議・演習「学校の実態に即した授業プランづくりⅡ」 ー研究授業をもとにー ・授業実践の交流 ・研究経過の整理と改善点の視点
第3回	協議・演習「学校の実態に即した授業プランづくりⅢ」 ・研究成果と課題の整理・共有 ・次年度に向けての方向性 等 講義『小学校外国語活動』の充実にめざして ー中学校との連携の在り方ー

イ 課題

本年度実施した「外国語活動研究講座」は、共通のテーマに沿って授業プランの作成や授業の実践を行うのではなく、各自が設定した研究テーマに沿って実践を行うという構成であった。そのため、第1回では、各自の研究テーマの設定を行う内容が中心となり、授業の組立て方について共通の理解を図ることができなかった。また、第2回、第3回に行った授業実践の交流は、当所で理解・習得したことを反映させた実践というよりも、それぞれの研究テーマに沿って行われた実践についての協議となった。

技能の習得については、第1回にコミュニケーションを図る楽しさを体験する活動やALT等とチーム・ティーチングで行う活動等、英語を用いた活動を扱った。しかし、研修の形態が、主に講師とALTによる模範授業であったため、これらの活動について理解はできたものの、これらの活動を進める技能を習得するには至らなかった。また、第2回は授業実践の発表が中心となり、評価の行い方等、新たな理解や習得を図ることができなかった。

(2) 指導力向上プログラムの策定に向けて

ア 指導力向上プログラムとは

『小学校外国語活動研修ガイドブック』には、「小学校における外国語活動の実施に当たっては、指導者に対する研修がきわめて重要である。小学校の教師である以上、小学校外国語活動の基本理念等を理解するとともに、指導力の向上及び英語運用能力の向上を図り、授業を円滑に進めることが求められる」¹⁰⁾と小学校教員の指導力の向上及び研修の重要性が述べられている。

また、表12は、研修の参加回数に対する指導全般への不安を、「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均を求めた結果である。表12に示すとおり、研修への参加回数が多い教員は指導全般に対する不安が少なくなっており、「調査（教員用）」の結果からも、「公的な

機関が実施する研修」や「校内研修」等、研修の実施が教員の指導力向上や不安の解消に効果があることがわかった。

表13は、公的な機関が実施する研修、校内研修、その他の研修に一度でも参加したことがある教員の割合を表している。表13に示すとおり、国や県が実施している研修に一度でも参加をしたことがある教員の割合は50.0%、校内研修に参加をしたことのある教員の割合が75.0%、その他の研修に一度でも参加したことがある教員の割合は11.5%と、校内研修に一度でも参加をしたことがある割合が最も高くなっている。また、表14は「調査（学校用）」において質問した校内研修の回数に対する教員の指導全般への不安を表している。回答のあった16校の平均回数である4回を基準として、指導全般に対する不安の程度を「強く不安を感じる＝4」「不安を感じる＝3」「少し不安を感じる＝2」「不安を感じない＝1」として平均値を求めた結果、表14に示すとおり、研修回数の多い学校の教員は不安の程度が低くなっている。教員が最も多く参加している校内研修を充実させることが、多くの教員の不安を解消し指導力を向上させることにつながると考える。

そこで、本研究では、指導力向上プログラムを、図5に示すとおり「校内研修と自己研修を組み合わせた一連の流れ」ととらえ、小学校教員のとまどいや不安に即したより実践的な研修の実現をめざす。

なお平成22年度には、教員の意識調査をもとに「外国語活動実践研修講座」を実施し、研修講座の内容や研修方法についての検証や分析をととして校内研修と自己研修を組み合わせた指導力向上プログラムを提案する。

表 12 指導全般への不安

（研修への参加回数別）

※合計回数については、各研修の「3回以上」を「3回」として計算している。

研修への参加回数	平均値
7回～9回	1.83
4回～6回	2.36
1回～3回	2.74
0回	3.06

表 13 研修に一度でも参加したことがある教員の割合

公的な機関が実施する研修	50.0%
校内研修	75.0%
その他の研修	11.5%

表 14 指導全般に対する不安
（校内研修の実施回数別）

平均値	
4回未満の学校	4回以上の学校
2.69	2.48

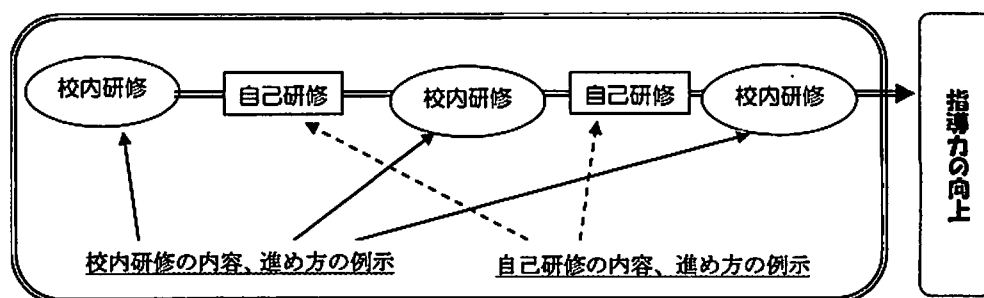


図 5 指導力向上プログラムの流れ

イ 「平成22年度 外国語活動実践研修講座」

(7) 研修講座の実施形態

本年度実施した「外国語活動研究講座」の課題として、各自が設定した研究テーマに沿って実践を行ったことにより、当所で理解・習得したことを実践に反映し、共通の視点を持って協議を行えなかったことを挙げた。そこ

で、「外国語活動実践研修講座」では、本年度の課題を踏まえるとともに、研修と実践の繰り返しの中で研究を

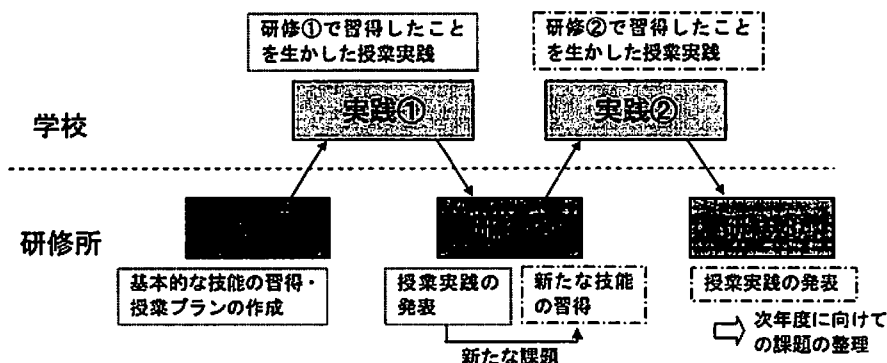


図 6 平成 22 年度「外国語活動実践研修講座」の流れ

深める従来の研究講座の構造をより充実させて、図6に示すとおり、「研修において理解・習得したことを、各学校で実践し、次回の研修で共有する」といった実践研修講座の特性を生かした講座内容とする。

研修①において基本的な技能の習得や授業プランの作成を行い、研修①で習得したことをもとに授業実践（実践①）を行う。その後、研修②において授業実践の発表を行うが、その中で新たな課題が生まれると考えられる。そこで、研修②では、新たな課題を解決するための新たな技能の習得を行い、研修②で習得したことを生かして授業実践（実践②）を行う。また、研修③では、授業実践の発表を行い、次年度に向けての課題の整理につなげる。このように、「習得→授業実践→発表」を繰り返すことにより、当所の研修で習得したことの定着や授業実践の交流が図られると考える。

また、習得と実践の繰り返しといったこの一連の流れは、校内研修と自己研修を組み合わせた指導力向上プログラムにも取り入れることができると考える。

(イ) 研修講座の要素

「調査（教員用）」の結果から、英語に関する知識や英語の使用に対して自信のない教員や「外国語活動」の目標の理解が低い教員、授業の組立て方がわからない教員が「外国語活動」の指導に対して不安を感じていることや、評価に関する研修を希望する意識が低いことが課題として挙げられた。そこで、指導力の向上に必要な要素として、「英語を用いた活動に関すること」、「『外国語活動』の目標の理解に関すること」、「授業の組立てに関すること」、「評価に関すること」の4つの要素を提案し、表15に示すとおり「外国語活動実践研修講座」の内容に取り入れる。

表 15 「平成 22 年度 外国語活動実践研修講座」の内容

	講座形態	内 容	
第 1 回	講 義	「小学校外国語活動」のめざすもの ー児童のコミュニケーション能力の案地を養うためにー	… b
	実 習	「小学校外国語活動」の指導の工夫Ⅰ ・担任やALT等の役割と連携 ・TTでのコミュニケーション活動 等	… a
	実 習	「小学校外国語活動」の指導の工夫Ⅱ ・「英語ノート」を活用したコミュニケーション活動 等	… a ・ c
	演習・協議	自校における「小学校外国語活動」の取組 ・現状と課題 ・改善に向けた視点	
	演習・協議	学校の実態に即した授業プランづくり ・授業プランの作成 ・相互検討	… c
第 2 回	協 議	自校の実態に即した実践 ・授業実践の発表と交流	… a ・ c
	演習・協議	「小学校外国語活動」の指導の工夫Ⅲ ・教材や教具の工夫 ・指導上の工夫 ・評価の在り方 等	… c ・ d
第 3 回	講 義 演習・協議	学校全体で取り組む「小学校外国語活動」 「小学校外国語活動」の充実をめざして ・授業実践の発表と交流 ・成果と課題の整理・共有 ・来年度に向けての方向性 等	… a ・ d

※ a…英語を用いた活動に関すること b…「外国語活動」の目標や内容の理解に関すること
c…授業の組立てに関すること d…評価に関すること

a 英語を用いた活動に関すること

「調査（教員用）」から、英語に関する知識や英語の使用に対して自信のない教員が、「外国語活動」の指導に

対して不安を感じていることがわかった。しかし、「外国語活動」において、学級担任が英語を用いようとする姿を児童に見せることは、英語を用いることに抵抗を感じる児童にとっての手本となり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると考えられる。そこで、「英語を用いた活動に関する」として、実習『『小学校外国語活動』の指導の工夫Ⅰ』において、「クラスルーム・イングリッシュ」を用いた授業の進め方やALTとのティーム・ティーチングによる授業の進め方を、実習『『小学校外国語活動』の指導の工夫Ⅱ』において、歌やチャンツ等の活動の進め方を研修する。実習を行う際には、「外国語活動研究講座」の課題を踏まえ、講師とALTによる模範授業だけではなく、模範授業から学んだことをもとに受講者が実際の活動を考えてといった演習の要素も取り入れるようにする。また、協議「自校の実態に即した実践」において、第1回の実習をとおして習得したことを生かした授業実践の発表を行う。

b 「外国語活動」の目標の理解に関すること

「調査（教員用）」から、「外国語活動」の目標をあまり知らないことにより「外国語活動」に対して漠然とした不安を感じていることがわかった。そこで、『『外国語活動』の目標の理解に関する』として、講義『『小学校外国語活動』のめざすもの』において、「外国語活動」の目標や内容の理解を図る内容を扱う。さらに、具体的な授業のイメージが持てるように、学習指導要領の目標や内容といった理論だけでなく、「英語ノート」が導入された背景やその内容、担任が進める外国語活動の授業の在り方といった内容も取り入れることとする。

c 授業の組立てに関すること

「調査（教員用）」から、「指導計画の立て方」に対する不安が高く、歌やゲームといった一つ一つの活動の進め方は理解していても、「外国語活動」の授業を具体的にどのように組み立てればよいかわからない教員がいることがわかった。そこで、「授業の組立てに関する」としては、実習『『小学校外国語活動』の指導の工夫Ⅱ』において、英語ノートの活用のしかたを、演習・協議「学校の実態に即した授業プランづくり」において、基本的な授業の組立てについての理解や授業プランの作成を行う。協議「自校の実態に即した実践」では、授業実践の発表をとおして授業の組立てについての協議を行う。また、演習・協議『『小学校外国語活動』の指導の工夫Ⅲ』において、地域や児童の実態を生かした教材や指導計画の工夫について理解・習得を図り、演習・協議『『小学校外国語活動』の充実をめざして』において、授業実践の発表・交流を行う。

d 評価に関すること

「調査（教員用）」から、評価に関する研修を希望する意識が低いことがわかった。しかし、先に述べたとおり、「外国語活動」の評価が教科のような数値による評価ではないものの、児童がどのようなことを学んでいるのかを明らかにすることは授業の改善や児童の興味・関心を高めるという意味において重要である。また、評価規準を作成することにより、「外国語活動」の目標を単元あるいは1時間の授業でどのように具現化すればよいのかを明確にすることができる。そこで、「評価に関する」として、演習・協議『『小学校外国語活動』の指導の工夫Ⅲ』において、「外国語活動」における評価の在り方の理解や評価規準の作成、評価方法の習得を図り、演習・協議『『小学校外国語活動』の充実をめざして』において、評価を取り入れた授業実践の発表・交流を行う。

(7) 研修講座の手法

先に述べたとおり、平成22年度は「外国語活動実践研修講座」の内容や研修方法についての検証や分析をとおして、校内研修と自己研修を組み合わせた指導力向上プログラムを提案する。そこで、指導力向上プログラムの策定に向けて、「外国語活動実践研修講座」の内容に、校内研修や自己研修に結びつけられる手法を取り入れる。

a 校内授業研究の進め方に関する手法

校内研修の一つとして授業研究が挙げられる。『小学校外国語活動研修ガイドブック』には、校内研修のねらいとして、「①教師個々の指導力向上を図り、学校として教師の一定水準の力を維持向上する。②教師の共通理解を図り、指導力向上へ向けての共通の目標を持つ。③全教員が、授業を通して他クラスの児童の実態を見ることにより、悩みや問題点、課題等を共有する。④優れた指導法や教材開発の技法を、授業を通して直接学ぶこと

で、個々の指導技術の向上を図る」¹¹⁾といった内容が示されているように、授業研究が教員の指導力向上に様々な面で関わっていることがわかる。しかし、「事後研究会が感想の交流に終わってしまう」「どのような視点で授業を見ればよいかわからない」等、授業研究をうまく進められないという声が「外国語活動研究講座」の受講者から聞かれた。そこで、校内授業研究の進め方に関する手法として、「授業評価シート」とワークショップ型研修を取り上げる。

「授業評価シート」とは、参観者が授業を観察する際に用いる観点を例示したシートのことである。このシートを用いることで、授業者の意図を参観者に明確に示したり、参観者が共通の視点を持って事前研究会や研究授業、事後研究会に参加したりすることができる。

ワークショップ型研修とは、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学び合ったり創り出したりする研修である。ワークショップ型研修の手法を取り入れることで、主体的に課題の解決にかかわり、多様な視点から改善策を見つけ出すことができる。

「外国語活動実践研修講座」での授業実践の発表の際には、「授業評価シート」やワークショップ型研修の手法を取り入れ、受講者が自校の授業研究でも活用できるようにする。

b 担当経験等の差に対応するための手法

図7は、「調査（学校用）」において「本年度、校内研修は誰を対象として行いましたか」の質問に対して、校内研修を実施している学校16校から複数回答で回答を求めた結果である。図7に示すとおり、16校中15校が「全ての教員を対象とした研修を行ったことがある」と答えている。

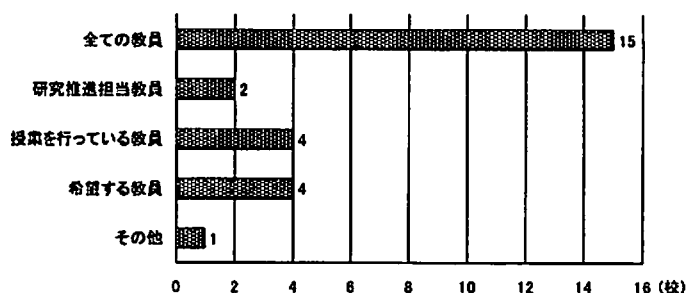


図7 校内研修の対象

また、図8は、「外国語活動」の授業の担当経験を表している。図8に示すとおり、41.1%の教員が、「これまでに『外国語活動』『英語活動』どちらの授業も担当したことがない」と答えている。また、前述の表13に示したとおり、国や県が実施している研修に一度でも参加をしたことがある教員の割合は50.0%、その他の研修に一度でも参加したことがある教員の割合は11.5%であることがわかった。以上のことから、校内研修には多くの教員が参加しているが、参加者の中には『外国語活動』の授業を担当している、

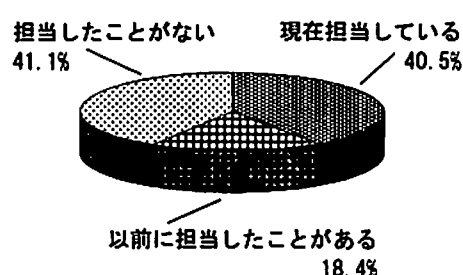


図8 「外国語活動」の担当経験

『外国語活動』に関する校外での研修に参加している」といった『外国語活動』に関わる機会の多い教員と、そうでない教員が混在している。

当所が行う「外国語活動実践研修講座」は、担当経験等にかかわらず全ての教員を対象としており、校内研修と同様に「外国語活動」に関わる機会の多い教員もそうでない教員も参加することが考えられる。そこで、「外国語活動実践研修講座」では、班別演習を多く取り入れ、「外国語活動」に関わる機会の多い教員や少ない教員が同じグループになるように班編制を行う。個人での演習と違い、「外国語活動」に関わる機会の多い教員が中心となって班別演習を行うことで、これまで「外国語活動」に関わる機会の少なかった教員も安心して研修に参加できると考える。また、「外国語活動実践研修講座」の受講者が、当所で研修した内容を自校の校内研修で行う際にも、班別演習を取り入れた研修や班編制の工夫が活用できると考えられる。

c 自己研修に向けた手法

前述の図6に示したとおり、実践研修講座は習得と実践の繰り返しを行う。そこで、受講者による実践の手法をとおして、授業を振り返るためのチェックリストや具体的なクラスルーム・イングリッシュの使用例を取り上げ、自己研修に結びつけられるようにする。

「外国語活動実践研修講座」では、演習・協議「学校の実態に即した授業プランづくり」において、「外国語活動」の授業を組み立てたり授業を行ったりする際の視点を整理したチェックリストを作成する。そのチェックリストは、自己の授業を振り返る際にも活用できると考えられる。

また、実習「『小学校外国語活動』の指導の工夫Ⅰ」において、「クラスルーム・イングリッシュ」を用いた授業の進め方についての内容を扱う。クラスルーム・イングリッシュの使用例を示したり、『小学校外国語活動研修ガイドブック』に付属しているCDの活用のしかたを紹介したりするが、クラスルーム・イングリッシュの使用例や『小学校外国語活動研修ガイドブック』の付属CDは、受講者が自校でクラスルーム・イングリッシュの習得を図る際にも活用することができると考えられる。

さらに、当所での研修で作成したチェックリストや、クラスルーム・イングリッシュの使用例、授業プラン等をe-ラーニングに取り入れることにより、自校での実践をさらに充実させることができると考えられる。

おわりに

本年度は、県内の小学校における教員の「外国語活動」に対する意識をアンケートにより調査し、その分析結果や「平成21年度 コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動研究講座」の課題を「平成22年度 外国語活動実践研修講座」の講座内容に反映させることができた。しかし、平成23年度の「外国語活動」の完全実施を控え、来年度は、「外国語活動」に関する校内体制の整備が本年度以上に求められるとともに、教員に対してもさらなる指導力の向上が求められると考える。また、今回のアンケート調査の結果では、約半数の教員が外国語活動の指導に対して不安を感じており、「外国語活動」の実施に際しては、指導力の向上とともに教員の不安を取り除くための取組が必要であると考えられる。

そこで、来年度は、教員の指導力向上や不安の解消に向け、「外国語活動実践研修講座」の実践をとおして、受講者の「外国語活動」に対する意識の変容や、理解度及びスキルの変容、また研修内容及び研修方法の有効性について分析・検証を行い、指導力向上プログラムを策定する。

なお、本研究の推進にあたって、研究員として御協力いただいた県立娯野台生涯教育センター本田毅主任専門指導員、兵庫教育大学大学院吉田達弘准教授並びにアンケート調査に御協力いただいた18校の皆様に心より感謝したい。

注)

- 1) 『小学校学習指導要領』（平成20年文部科学省告示第27号）
- 2) 臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」, 1986
- 3) 文部科学省「平成19年度小学校英語活動実施状況調査」, 2008
- 4) 文部科学省「平成19年度小学校英語活動実施状況調査」, 2008
- 5) 教育課程部会 外国語専門部会（第6回）配付資料6「小学校の英語教育に関する意識調査 結果の概要」, 2006.3
- 6) 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』, 2008, p.15
- 7) 兼重昇、直山木綿子編著『小学校 新学習指導要領の展開』, 明治図書, 2008, p.24
- 8) 兼重昇、直山木綿子編著 前掲書, p.24
- 9) 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』, 2008, p.33
- 10) 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』, 2008, p.10
- 11) 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』, 2008, p.72